

黒船壁掛け(表)



同(裏)

開港のひろば

NEWS YOKOHAMA ARCHIVES
OF HISTORY

編集・発行/横浜市総務局横浜開港資料館
横浜市中区日本大通3番地 T231 電話(045)201-2100
発行日/平成元年9月20日
刷印/三信印刷所
横浜市広報印刷物登録第010083号 類別・分類B-BE160



第9代市長 渡辺勝三郎

展示資料の紹介

見つめた 条約調印を

黒船壁掛け

去る八月三一日 市厅舎二階の市長応接室で、ペリーの黒船を型どった壁掛けが、本市第九代市長渡辺勝三郎のご孫孫渡辺正直氏から本市に寄贈されることになり、渡辺氏から細郷市長に手渡された。私達は、今回の「波乱の半世紀—横浜市の誕生から戦後復興まで」展の準備調査で、市制施行以後、大正期までの歴代市長のご遺族を尋ね、お話を伺った。ほとんどがお孫さんの代となり、大方の日本人が辿った歴史と同様、その後の震災や戦争をはさむ道程は決して平坦でなかつたことを知った。

私達の不躾な照会に、快く応対して下さった皆様に改めてお礼申し上げたい。件の壁掛けも、そのなかで偶然に知った資料である。

この壁掛けは、當時英國領事館内の、関東大震災で焼焦げた玉楠の余材から作つたもの。堅固で虫を寄せぬ材質ゆえか、破損も無

く艶やかに光沢を放っている。裏には、大正一四年一月三五日付の

原富太郎(三溪)の揮毫がある。

それによると、この壁掛けは、当時の横浜市教育課長中川直亮が、江戸時代の昔から、そして日米和親条約の調印を見つめ、横浜の発展を見守ってきた、この由緒ある玉楠の木が震災で姿を消してしまったのを惜しみ、その余材でペリーの黒船を模作(因案は県立工業学校教諭水田直三、彫刻吉田兼吉)させ、かつ当時の市長渡辺勝三郎の献身的な震災復興への努力に感謝し、横浜市復興会会長の原に謝辞の執筆を依頼し、震災の記念に渡辺市長へ贈ろうとしたものだと

いう。原は「余、亦災後、附渡辺君之驥尾、屢同寢食」と記す。

渡辺勝三郎は、明治五年岡山県に生れ、一高・東大英法科を卒業、内務省に入省、長崎県知事を経て大正一年一一月に第九代横浜市長に就任した。翌年大震災に遭い、直ちに市政財界の有力者に呼びかけて横浜市復興会を組織し、全市を挙げての復興事業の先頭に立つた。一四年四月一〇日辞任し、東洋拓殖会社總裁に転じたが、日夜震災復興に明け暮れた横浜市長時であった。また、教育課長中川

直亮は、広島高等師範出身の教育者で、大正九年横浜市視学となり、一年教育課長、昭和四年退職して横浜商業専修学校(現、市立横浜商業高校定時制課程)校長、横浜女子専修学校(現、市立港高校)初代校長に就任、一〇年一月まで勤めた(『神奈川県名鑑』昭和一〇年)。震災後は、教育復興事業の中心となり、また震災記念館開設のため資料収集に奔走したという。大震災で黒焦げとなつた英國領事館構内の玉楠は、翌年の春夏の頃、奇跡的にもその根元から新芽を出して再生し、新たな枝葉を繁らせて始めた。この玉楠は、加山道之助(横浜史談会の建議を契機として、名勝史蹟天然記念物等保存に關する臨時委員会によって保存すべき名木の筆頭に指定され、大正七年以後、市当局が「ペルリ提督上陸史蹟」「我国開港談判所遺跡」として手厚い保護を加えてきたもの(『事務報告書』)。昭和五年夏、英國領事館新築工事のため、再び成育した玉楠は海岸通り方向へ約一〇メートルの場所に、慎重に移植された。今、この玉楠は、横浜開港資料館の中庭で、見事な深緑の枝葉を広げている。そしてこのたび、渡辺氏のご厚意によつて、条約調印を始め大震災までの数々の出来事を目撃し、今や黒船の壁掛けに姿を変えた玉楠は、元の場所に戻り、二代目の成長を見守ることになった。

(佐藤孝)

「波乱の半世紀」展に寄せて

今井清一先生に聞く

——本日は、九月二〇日から開催の「波乱の半世紀—横浜市の誕生から戦後復興まで—」展にちなんだ館報恒例の対談を、横浜市立大学名誉教授の今井清一先生にお願いいたしました。

今井先生は『横浜市史』・『横浜市会史』の編集、執筆に携わられ、ご専門の政治史のみならず、横浜の近代史全般に目配りされています。そこで、まず最初に『横浜市会史』の編集などを振り返ります。そこでは、横浜の近代史の特徴といつた点からお話をください。

今井 横浜は、開港によって上から下へと急速に変化していった。港湾都市・港都と言えますが、開港後に生糸貿易を中心とした大貿易商の蓄積した富は巨大なものでした。そして貿易商の拠出した歩合金によって都市施設が早くから整備されましたが、やがてその帰属をめぐって政治対立がおこります。一〇〇年前に市制が施行された当時は、東京は別として他の大都市では市政への関心は低かったのですが、横浜だけはそのため極めて政争が活発でした。しかしその結果は都市としての発展を促すような方向へは進んでいます。

——これまでの横浜の近代史研

でいきました。



今井清一氏

——『横浜市史』では、第五巻の大正期を担当されましたが、執筆に際して史料状況はどうだったのですか。

今井 開港期についてはいろいろ本は第一次世界大戦を好機として日本は急激な経済成長をとげますが、横浜は立ち遅れのツケが回ってきて、それに乗り遅れます。そのためいち早く戦後恐慌がおこり、貿易商が斜陽化し、関東大震災を見て昭和恐慌で没落する。そういう中で外からの力に依存しながら、周辺地帯を中心とした工業化が進んでいく。市政も自主性がもてず、外からの力に順応するしかない。そんな風に概観できようかと思います。

——最近整理している史料において、最も多く見えていた行事や儀式の案内状や資料編でも選挙や党派関係のデータを判るかぎり載せています。『横浜市会史』はこれらの点にも書いていないものが多いのですが、『横浜市会史』はこれらの点にもかなりふれていますし、第六巻の資料編でも選挙や党派関係のデータを判るかぎり載せています。

今井 おこなった行事や儀式の案内状やパンフ、ビラ、チラシなどです。市が

——この市会選挙、横浜市政の

開始にたいして、横浜の人びとの

関心度は如何だったのでしょうか。

今井 市制施行から二十世紀の初めまでは、横浜の市会議員選挙の投票率は大阪や神戸に比べてずっと高く、市政への関心が高かつたといえます。ご承知のように商人派と地主派の抗争が激しかったわけですが、それだけ市政の役割が大きくなり、それが政争の目標—獲物になつたのでしょう。

奈川県史「だより」で大正三、七年

の市会議員選挙の選挙人名簿につ

いてお書きになつていましたね。

今井 あれは随分前になります。

ここで一昨年に開催した『市制施

行と横浜の人びと』という展示に

市制施行当時の市会議員選挙人名簿が展示され、これをまとめた同

名の冊子でも紹介されていますが、

この冊子でも紹介されていますが、



市原盛宏

しろこれを利用して自前で港湾建設などを進めようと考えた。地主派の方は、これを市に帰属させ、それで浮く財源を土木事業などに回させて利益を上げようとしたのだというものです。なかなか面白い見方だと思います。館報(二六号)でも述べられているように、国の政策とのからみあいもあり、おまとめになると面白いでしようね。

この両派の抗争は、やがて商人派の反主流と結んだ地主派の勝利となり、地主派の露骨な利権あさりが横行します。全国的にも利益誘導型の政治が支配的になる。星亨の時代です。

——さきほど中産階級が乏しい
というお話しがありましたが、そ
れは横浜の政治状況にどの様な形
で絡んでくるのでしょうか。

三郎が正義派と名乗った市民層の露戦後に見られるのですが、横浜は早い。だが、あとが続かない。先駆的な動きを支える勢力がないのでしょうか。

——横浜の中産階級というのはどの様な層を指すのでしょうか。

今井　あまり突っ込んで考えていないのですが、横浜は貿易商と横浜ドックくらいでもついて、広く産業が発達していないで、市民の層が薄いように感じます。吉川英治の自伝小説『忘れ残りの記』を見ても、明治末に小学校を出した人たちが働く職が極めて乏しいです。

——今、市政一〇〇周年開港一三〇周年を記念した横浜博覧会が開かれていますが、明治四二年には開港五〇年祭が開かれました。ほかにも昭和一〇年の震災復興博覧会などがありますが、大きなイベントというのは、時代を区分する指標となり得るのででしょうか。

今井　五〇年、一〇〇年、いうのが、とくに画期になる必然性はないでしょが、一つのチャンスだからしめぐくり、決算をしようとすることにはなるでしょう。開港五〇年祭もそういう意味をもつて

木治の口で聞かねば、どういふに
どの様な層を指すのでしようか。
今井 あまり突っ込んで考えていい
ないのでですが、横浜は貿易商と横
浜ドックくらいでもつていて、広
く産業が発達していないで、市民
の層が薄いようになります。吉川
英治の自伝小説「忘れ残りの記」
を見ても、明治末に小学校を出した
人たちが働く職が極めて乏しい
です。

いて、市歌や市章を作り、「開港五十年史」も編纂して、横浜のアイデンティティを確認しています。しかし後からみると、これが一つのピークで、これ以後下り坂になってしまいます。

を考える必要があるでしょ
原より少し前に鶴原定吉が
長になりますが、鶴原も土
治三二年のいわゆる日銀
イキで理事・営業局長とし
店長と一緒に辞職しており、
辞職組の多くは大阪財界
その中心人物になつていた
原と鶴原の関係はそれ以
りませんが、鶴原は大阪
で、港湾建設、市電の新
契約の締結などに手腕を
います。これらはやがて
『横浜貿易新聞』紙上で
ことと同じです。三宅がア
で『大阪朝日新聞』の記述
たのがちょうど鶴原市長
すから、鶴原市政に学んば
少なくないでしょ。

見ても、明治末に小学校を出た人たちが働く職が極めて乏しいです。

が、市政がこれで何が意味合いを持つものだろうかと考えているのです。

が、市政がこれで何が意味合いを持つものだらうかと考えているのです。

今井 都市の発展につれて市長の地位が上がったということがあるでしょう。給与は市原市長から上がりだし、荒川市長で急上昇しています。

もう一つには政府との結び付きを強めて、港湾修築を進めようといふねらいもあるのでしよう。市原市長の後の三橋市長も荒川市長も時の総理大臣の推薦で、しかも二人は相次いで神奈川県書記官兼臨時横浜築港局次長をつとめています。

を強めて、港湾整備を進めようといふねらいもあるのでしよう。市原市長の後の三橋市長も荒川市長も時の総理大臣の推薦で、しかも二人は相次いで神奈川県書記官兼臨時横浜築港局次長をつとめています。

原より少し前に鶴原定吉が大阪市長になりますが、鶴原も市原も明治三二年のいわゆる日銀のストライキで理事・常務局長と名古屋支店長とを辞職しており、この時の辞職組の多くは大阪財界に入つて、その中心人物になっています。市原と鶴原の関係はそれ以上はわからりませんが、鶴原は大阪市長として、港湾建設、市電の新設、報償契約の締結などに手腕をふるっています。これらはやがて三宅馨が『横浜貿易新聞』紙上で主張することと同じです。三宅が早稻田を出て『大阪朝日新聞』の記者になつたのがちょうど鶴原市長のときですから、鶴原市政に学んだことが少なくないでしょう。

を考える必要があるでしょう。市原より少し前に鶴原定吉が大阪市長になりますが、鶴原も市原も明治三二年のいわゆる日銀のストライキで理事・営業局長と名古屋支店長とを辞職しており、この時の辞職組の多くは大阪財界に入つてその中心人物になっています。市原と鶴原の関係はそれ以上はわかりませんが、鶴原は大阪市長として、港湾建設、市電の新設、報償契約の締結などに手腕をふるつています。これらはやがて三宅磐が『横浜貿易新聞』紙上で主張することと同じです。三宅が早稲田で『大阪朝日新聞』の記者になつたのがちょうど鶴原市長のときですから、鶴原市政に学んだことが少なくなっているでしょう。

——横浜の近代の時期区分については、いろいろ意見がありますが先生はどうお考えでしょうか。

今井 市制施行以後を大きく分けると、第一次世界大戦の前までが第一期、それから関東大震災後の鶴見等の合併までが第二期、それから敗戦までが第三期。そうすると、とほほ明治期、大正期、昭和戦前期と重なりますね。

最初の時期は、さらに最初に述べます。

史』で石井寛治さんが一九一四年から八年までの各府県の普通銀行の預金額と貸出額の伸びを調べていますが、それでは関西と九州とが上位で、神奈川県は沖縄県について低い位置にあります。

横浜市の歳人は一九一七年にやつと伸びはじめ、一八年から急激に伸びます。大正前期の横浜市政はいかにも貧困ですが、この時期から久保田市政の華やかな時期をかれます。だがそれも一時で一九二〇年、大正九年の戦後恐慌が横浜財界に大打撃を与えます。

ここで注目されるのは、茂木商店・七十四銀行が倒産するなかで、大学出の経営者である井坂孝がその善後処理のための横浜興信銀行の副頭取に起用され、早くも翌一九二一年に横浜商業会議所の会頭に就任したことです。それまでその椅子は原善三郎、小野光景、大谷嘉兵衛、茂木保平と四人の大質易商が独占していました。それが井坂という少壯実業家に代つたのです。横浜が貿易だけでは立ち行かなくなり、中央とのつながりを求めるようとしたことの現われといえます。

期と重なりますね。
最初の時期は、さらに最初に述べた市制施行期、つぎの地主派全盛期、それに市原市政から大正頭までの市政の振興をめざす時期に分けられます。

降の第二期となります。『横浜市史』で石井寛治さんが一九一四年から八年までの各府県の普通銀行の預金額と貸出額の伸びを調べていますが、それでは関西と九州とが上位で、神奈川県は沖縄県について低い位置にあります。

横浜市の歳入は一九一七年にやつと伸びはじめ、一八年から急激に伸びます。大正前期の横浜市政はいかにも貧困ですが、この時期から久保田市政の華やかな時期を迎えます。だがそれも一時で一九二〇年、大正九年の戦後恐慌が横浜財界に大打撃を与えます。

ここで注目されるのは、茂木商店・七十四銀行が倒産するなかで、大学出の経営者である井坂孝がその善後処理のための横浜興信銀行の副頭取に起用され、早くも翌一九二一年に横浜商業会議所の会頭に就任したことです。それまでその椅子は原善三郎、小野光景、大谷嘉兵衛、茂木保平と四人の大貿易商が独占していました。それが井坂という少壮実業家に代ったのです。横浜が貿易だけでは立ち行かなくなり、中央とのつながりを求めるようとしたことの現われといえます。

——井坂会頭の登場後に関東大震災が起り、その後鶴見などの工業都市化が進められますね。

今井 そうです。このあとすぐに関東大震災が起こって、横浜は東

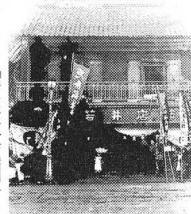
『関東大震災前 横浜博覧図』展余話

常盤町・若松屋

去る六月一四日木ノハシした

ご覧いただいた方々からさまざま
な御指摘御教示を受けることがで
きました。厚く御礼申しあげます。

や『横浜成功名著錄』(明治四三年) や『横浜社会辞彙』(大正六年) にも紹介されている有力鰐節商で、店舗は、常盤町五丁目七六番地に所在し、馬車道風月堂の並びにあつた。提供を受けた店舗の写真は、



若松屋(井上儀兵衛)

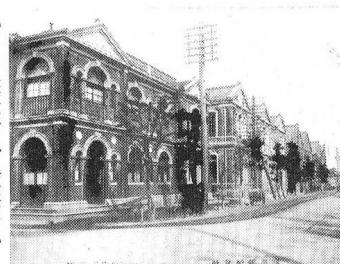
明治一四（一八八一）年四月新築移転した三菱社の横浜社屋については、フランス人建築家レスカス（Lescasse, Jules）が設計し、帶鉄と鉄棒とによって補強された

様式を合わせて設計したことも注目される。

● 海岸通・旧三菱社

店舗は、岩谷田五丁目七番地に所在し、馬車道風月堂の並びにあつた。提供を受けた店舗の写真は、

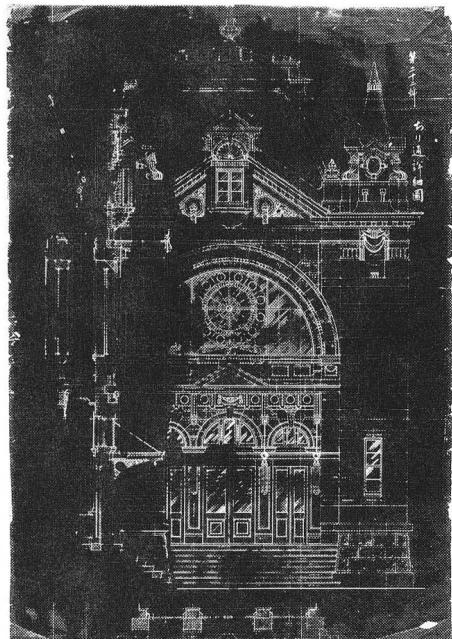
煉瓦造建築であつたことは文献
(Japan Weekly Mail, 1880, 3, 6)
によつて確認されてゐたが、その
外観は従来知られてゐなかつた。
今回、本展示の準備調査中に見直
した写真—明治一五年頃撮影にな
る伊勢山からの市街全景写真—に
三菱社の社屋の屋根が写つており、
海岸通り丁目一八番地菅原商会の
建物(と同)であることが確定でき



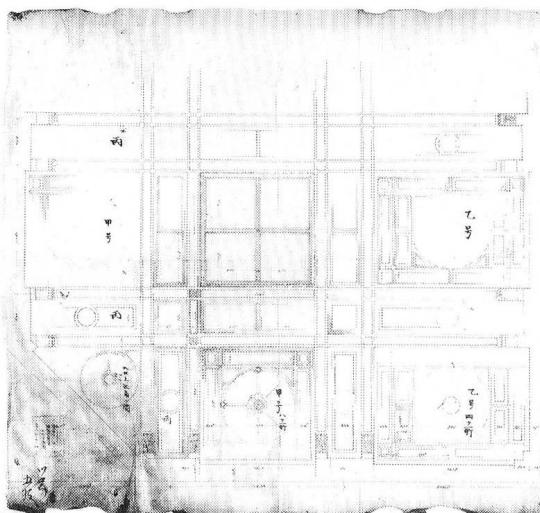
左から旧三菱社、日本郵船横浜支店、日本郵船倉庫。

開港記念会館の建築圖面

本展示がオーランした頃 横浜市開港記念会館(大正六年)のドーム群復元工事が完了し、震災前の往時の姿が再現されて話題をよん



開港記念会館詳細図



横浜正金銀行中央営業室天井伏岡(明治35年9月20日付)

九月二〇日の日付のある中央営業室硝子天井の伏図である。製図担

経路で瀬家に伝わったかは後考にまちたい。(良)

子氏から、御尊父で大工棟梁の廣瀬（旧姓柳川）辰吉氏旧蔵の建築図面等六六点の資料提供を受けた。そのなかには、横浜正金銀行本店（明治三七年 設計妻木頼黄）

資料よもやまばなし

イギリス女性の 横浜見聞記

秋の空には旅心を誘うものがある。そこで今回は、当館の新収資料のなかから、ある旅行記の一端を紹介しようと思う。

「元人の世界周遊記」九

リーカー夫人の世界周遊記

これがAlice Mary Reaアリス・レイまたはリアかもしれない)なるイギリス女性が、夫のチャーレズとともに、一八八一年(明治十四年)から一八九二年にかけて、およそ十か月半にわたる世界一周旅行をしたときの旅日記である。



リー夫人の世界周遊記

間を要するので、今回は解説原稿（タイプスクリプト）をおこすところができた横浜滞在の部分（東京への観光も含む）を紹介しておきたい。

ので（もちろん英文）、全部で六九ページ。あちこちに彼女自身が描いたスケッチや、購入した写真、さまざまな切り抜き、記念品などが貼られている。スケッチはなかなか巧みで、水彩が施されているものが多い。これらのイラストレーションは約二八〇点このまる。

写真でわかるように、美しい装丁の一冊である。表紙には Diary 1881-1882 と金文字がきかれ、これが内表紙のタイトルが A Journey

リーカーの旅程

そのまえに、夫妻の世界一周のルートをめぐりと辿つておくことにする。夫妻は、一八八一年八月三日、ロンドンを出発してリヴィア・ペールに向かつた。そして翌九月一日に蒸気船 Germanic 号に乗船まずアメリカをめぐらして、西回り

●太平洋横断

サンフランシスコから横浜まで
は、パシフィック・メイル社の汽
船シティ・オブ・リオデジャネイ
ロ号で三週間の船旅であった。連

述がある。

しかし、現在のわれわれには望むべくもない「優雅な」旅行ぶり、素人の旅人の記録のなかにも、当時の貴重な証言や、思いがけない発見があるのである。横浜や東京などにはあまり関心をもたなかつたバードと比べると、リー夫人の観光の日々の観察にも興味深い記述がある。

横浜至

一八八年(明治四年)二

2

る。

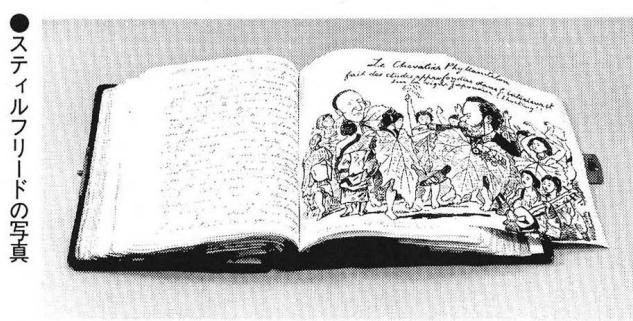
● 横浜到着
一八八一年（明治一四年）一二月一日の朝、船はようやく横浜港に着いた。久しぶりに「堅い大地」を踏み、グランド・ホテルに落ち着いて、おいしい昼食に幸福感を味わっている。同月二八日に神戸にむけて出航するまで、横浜には一六日間の滞在である。

日、見渡すかぎり海ばかりである。からだと同じ一等船室の乗客は合計三四人。そのなかに、やはり世界一周旅行の客が、ほかに六組（二三名）いて、ほとんど裕福な医師や商人の夫婦連れである。なかには召使同伴者もいる。リー夫妻はその何人かと旅の友となり、横浜でもしばしば行動を共にしている。

その他の乗客にも時代を反映している人々がいる。一等船室のウォード氏は、カナダの鉄道建設労働者として二千人の中国人を雇いに行く途中である。そして三等船室には、七八〇人余りの中国人出稼ぎ労働者が帰国のため乗りあわせている。リー夫妻は、一夕、船長について、この三等船室の「チャヤ・タウン」を覗きに出かけていく。

●**横浜の住人**
二日目の昼は約束通り、山手の
本郷土産品の写真アルバムには目
を引かれる。そしてベアトの写真
館を引き継いだスタイルフリードの
店で風俗写真を買っている。こ
の日記に貼られた「人夫」「布団」茶
屋の「むすめ」などの写真は、当時
の横浜土産の典型的なものであり、
いくつかはここで買ったものだろ
う。スタイルフリードが大勢の日
本人絵師を使って写真に彩色をし
ているとの貴重な証言もある。

●**スタイルフリードの写真**
本郷通りのショーウィンドウは
なかなか魅力的で、とくに外国人
向け土産品の写真アルバムには目
を引かれる。そしてベアトの写真
館を引き継いだスタイルフリード
の店で風俗写真を買っている。こ
の日記に貼られた「人夫」「布団」茶
屋の「むすめ」などの写真は、当時
の横浜土産の典型的なものであり、
いくつかはここで買ったものだろ
う。スタイルフリードが大勢の日
本人絵師を使って写真に彩色をし
ているとの貴重な証言もある。



『ジャパン・パンチ』の1頁が挿入された横浜滞在部分

ウォルター家を訪ねる。山手の丘には美しい住宅が建ち並ぶ。リー夫人によれば、山手の居留地の住人は、「平地」の住人より、社会階層が少々上だと考える傾向があるという。また、横浜の西洋人社会にはリーダーがおらず、催しものもなかなか開催しにくい。その辺が他の居留地社会とは違うといふ。

日本人については、頭でっかちなのがまず目に付いたようである。また、伝統的な和服の姿は絵のようで優雅だが、いつたん洋装になると、グロテスクで、なんともいえないほど馬鹿げているとの感想である。西洋人の描いた日本人の戯画を彷彿させる描写である。

●ワーグマンとの出会い

横浜の記事のなかで特筆すべきことは、かの有名なチャーレズ・ワーグマンと会い、その印象を書き留めていることである。

夫婦がワーグマンと知りあつたのは、横浜滞在二日目に、ワーグマンがホテルに夫妻を尋ねて、名刺を置いていったことに始まる。

その翌日に夫人はかれの訪問をうけた。リー夫人は風邪をひいて三日間ホテルにとじこもっていたところである。ワーグマンは油絵や水彩画を携えてきて見せてくれたが、ほとんどが未完成のものであった

といふ。リーフ夫人は、かれが『ジャパン・パンチ』（夫人は横浜『パンチ』）と書いている）の編集長であり、二十年前に『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』の特派員として日本に派遣されたとの経歴を記述したのちに、こう評している。

「（かれは）大変才気ある人であり、もう少し怠惰でなければ、財をなしていただろう」

「パンチ」の発行は不定期で、金が必要になつたときだけ出すのである。その滑稽記事や漫画はすべて全くローカルなもので、この雑誌に自分のことを書いてもらいたくて、多くの人が喜んで五ポンド払う。それは非常にラフで独創的なスタイルで仕上げられる。ワーグマン氏は本当の「ボヘミアン」で、國中を漫遊するのが大好きで、また「茶屋」で暮すのが大好きである。

この図柄は、ワーグマンのお気に入りのものだったようで、すでに『ジャパン・パンチ』創刊号（一八六二年七月）に掲載されたもの

●ワーグマン自筆のスケッチ

娘を描いたもので、右下に「C. ワーグマン、横浜、一八八一年一月二七日」とあり、リー夫妻が日本に留まっているのは、親戚がちがつたようであった。

そしてワーグマンいわく、「自分が日本に留まっているのは、親戚からできるだけ遠く離れていたため」で、「電報で連絡がとれる距離にいる」のを残念がつたという。リー夫妻もかれの奇人ぶりには少々驚いたようである。

リー夫人の日記には、『ジャパン・パンチ』の数葉がはいつている。横浜でワーグマンから貰つたか、あるいはもらったものかと思つたが、調べてみると、二年後の号に出でてくるものもある。このことでも、この周遊記があとから編纂されたものであることを示している。

もうひとつ注目すべきは、ワーグマンのサイン入りのスケッチが貼付されていることである。子守娘を描いたもので、右下に「C.



ワーグマン自筆のスケッチ

●名所見物と買物

そのほか、夫妻は汽車で東京見物（浅草、皇居、愛宕山、芝など）にでかけたり、箱根、江の島、鎌倉の大仏へ足を伸ばしたりしている。山手や根岸あたりはよく散策しており、根岸からの帰途には茶屋に寄つて「チヨンキナ踊り」を見ている。美術骨董屋巡りも大好きで、いろいろと買い込んだり、かくして横浜滞在も終わる。

なお、この日記は次回の展示で公開する予定である。（伊藤久子）



第3表 1戸あたりの平均居住人数

通り名	平均居住人数
本町通り	4.84(人)
弁天通り	3.47
海岸通り	5.80
海南仲通り	3.48
南北仲通り	3.00
東西横丁	3.63
東西横丁	3.95
7地区平均	3.82

女」と話された奉公人で、奉公人は一五三人に達した。

さらに、第三表は、一戸あたりの平均居住人数を通りごとに示すものである。通りによつて、かなりの差異があるが、平均では一戸あたり四人弱になっている。この数字は奉公人を含めたもので、奉公人を除けば数字はより小さくなつる。つまり、開港当初の横浜では、現在の都市と同様に「核家族的」な家が多かつたといえる。

第2表 男女別年齢構成

年齢(才)	男(人)	女(人)	合計(人)
1～9	36	27	63
10～19	55	53	108
20～29	111	65	176
30～39	104	46	150
40～49	70	35	105
50～59	37	8	45
60～69	10	1	11
70以上	1	1	2
合計	424	236	660

(不明 1人)

階層構成

次に市街地での階層構成について検討を加えたい。第四表は、五丁目における階層構成を示すもので、地所持人六二軒と借家一一軒が掲げてある。ここでいう地所持人とは幕府から土地を押持している商人のことであり、借家とは地所持人から家を借りている人々である。

第5表 地所拵借人一覽

No.	名 前	通り名	拝借地坪数	営 業 品 目
1	榛原屋 百次郎	本町通	100.7(坪)	塗物・小間物・臘・麻糸ほか
2	中屋 金兵衛	本町通	81.7	塗器類・瀬戸物
3	尼屋 利兵衛	本町通	50.0	
4	木村屋 文次郎	本町通		生糸・繭種
5	藤木屋 喜兵衛	本町通	119.7	塗物・生糸・水油・呉服ほか
6	山城屋 安兵衛	本町通	114.0	袋物・書物・織物・綿絵ほか
7	石川屋徳右衛門	本町通	90.0	糸類・呉服・太物・紙ほか
8	塩野屋 親八郎	本町通	360.5	糸・茶・織物・醤油ほか
9	漆屋 吉兵衛	本町通	82.5	砂糖・太物・臘・荒物ほか
10	伊勢屋 平作	本町通	52.5	糸類・水油・銅・鉄・釘ほか
11	東屋太郎左衛門	本町通	105.0	水油・呉服・太物・酒ほか
12	立野屋 源助	本町通	49.5	糸類・茶・瀬戸物・塗物ほか
13	浦賀屋 幸助	弁天通	44.0	糸・茶・呉服・塗物・紙ほか
14	橋本屋 弥兵衛	弁天通	44.0	糸・茶・呉服・塗物・紙ほか
15	大川屋 善兵衛	弁天通	76.0	糸・茶・呉服・塗物・紙ほか
16	阿波屋 万太夫	弁天通	37.1	糸・茶・呉服・塗物・紙ほか
17	綿屋 吉兵衛	弁天通	92.0	糸・茶・呉服・塗物・紙ほか
18	伊勢屋 吉次郎	弁天通	141.5	茶・塗物・酒・乾物ほか
19	石川屋 繁蔵	弁天通	143.5	呉服・銅板・太物・乾物ほか
20	渡辺 穎庵	弁天通	42.0	荒物・薬種・鉄物・乾物ほか
21	中島屋 喜助	海岸通	48.0	運送・食料・炭・薪・小道具
22	松川屋 又右衛門	南仲通	128.0	水油・海草・荒物・乾物ほか
23	石川屋 惣兵衛	南仲通	66.0	石炭・材木・異人食料
24	山城屋 兵助	南仲通	55.0	塗物・荒物・異人食料ほか
25	常盤屋 安蔵	南仲通	40.0	木綿・塗物・傘・荒物ほか
26	朝田屋 重作	南仲通	73.0	水油・荒物・外国人輸送品

『横浜市史・第2巻』「横浜町商人録」より

第4表 各通りの階層構成

通り名	地所持借人	借家
本町通	19(軒)	6(軒)
弁天通	15	29
海岸通	3	2
南仲通	8	31
北仲通	1	5
東横丁	8	22
西横丁	8	16
合計	62	111

又貸しすることも禁止され、法律上では借家は存在しないことになつてゐた。しかし、実際には地所押付借家を持つ一人につき三軒弱の借家を持つことになる。

では「地主」である地所押借人は、どうな人々だったのだろうか。第五表は、地所押借人六二軒の内、営業内容が判明している二六軒の商人の一覧である。この表から地所押借人の押借坪数と営業品目を知ることができる。さて、地所押借人の大部分は、

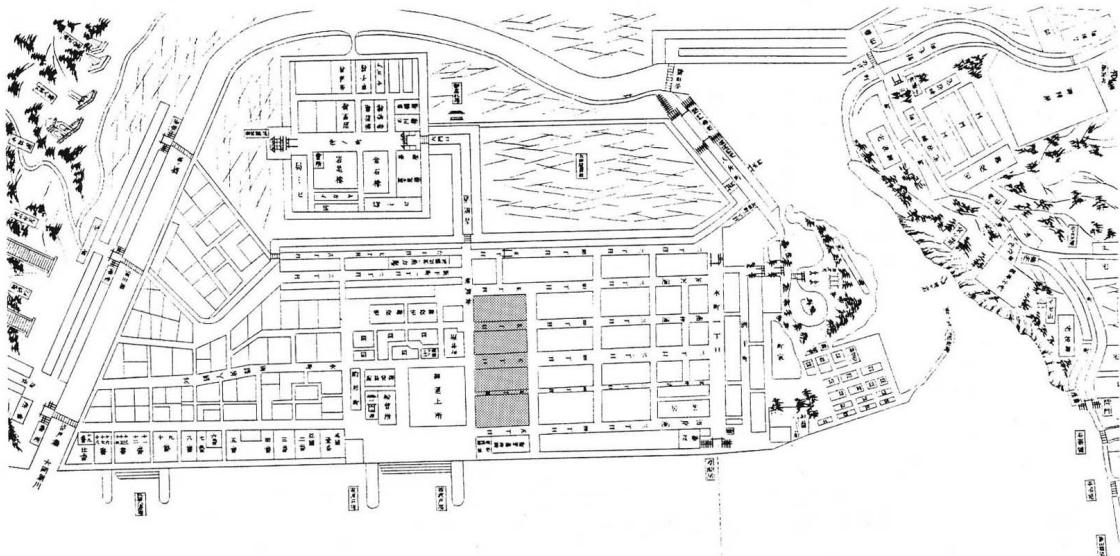
第6表 来住者の出身地一覧

國名	人數	下總	10	越前	2
武藏	373(人)	近江	8	陸奥	2
信濃	42	阿波	8	能登	2
伊豆	38	越中	7	佐渡	2
相模	31	遠江	7	甲斐	1
越後	25	伊勢	6	紀伊	1
駿河	23	三河	5	土佐	1
上野	14	攝津	5	肥前	1
上総	14	美濃	4	豊前	1
下野	11	安房	3	常陸	1
尾張	10	飛驒	3	合計	661

表に示すように生糸・茶・銅類・水油などを扱う貿易商人であつた。幕府は、横浜での貿易を始めるにあたつて各地から商人を移住させ、市街地の土地を彼らに貸し与えた。その結果、商人の中には百坪以上の土地を「保有」する者も現れ、彼らは貿易に従事するだけでなく、幕府から借りた土地を第三者に又貸しするようになる。こうして、市街地は貿易商人たる地所持借人を中心として、それに倍する借家人の来住によって形成されていくことになった。

移住者の出身地

では、市街地に来住した人々は、どこからやつて来たのだろうか。これを示すのが第六表である。この表は、五丁目に居住する六六一



幕末期の横浜市街図（斜線の部分が5丁目部分。現在の1丁目にあたる。）

文久3年(1863)のものと伝えられる。「御運上所」と記されているのが現在の神奈川県庁。

左手上が外人墓地、右手上が現在の野毛町から紅葉坂にかけての一帯である。

人を出身地別に区分したものである。出身地は全部で三一ヶ国に及んでおり、全国各地から横浜への移住があつたことを示している。

この中で特に多いのが武藏国内からの移住者で三七三人、全体の五六%を占めている。次いで信濃国四一人、伊豆国三八人、相模国三一人、越後国二五人、駿河国二三人となっている。この六ヶ国からの移住者だけで、全体の約八割を占めていることになる。

また、武藏国内からの移住者の内、江戸からの移住者が最も多く、二一人に達している。このことは、幕末期に江戸から横浜へ急激な人口移動があつたことを示している。さらに、江戸の中でも商業活動が活発な地域からの移住が多いことも指摘できる。

ちなみに、諸問屋商人が多くつた日本橋・京橋・芝からは四六人、廻米問屋・材木問屋の町である深川・本所からは三十人、幕府御用蔵のあった浅草からは二四人、当時の山手最大の町場といわれた神田からは二一人の移住をみることができ。

次に、江戸を除いた武藏国内からの移住者一六一人についても簡単にみておこう。その内訳は、橘樹郡五人、荏原郡六人、多摩郡二人、久良岐郡二十人、葛飾郡八人、児玉郡七人、秩父郡七人、足立郡六人、入間郡五人、都筑郡二人で、横浜周辺地域からの移住

が多かつたことを示している。

このほか、地方都市からの移住者も多く、東海道の宿場であつた神奈川宿から三四人、品川宿から十四人、府中宿から十人、小田原宿から六人、戸塚宿から三人、保土ヶ谷宿・由比宿・岡部宿から各一人の移住者を見ることができる。

また、港町・城下町・門前町(下田・長岡・福井・富山・柏崎・善光寺)などからも移住がなされて

いる。

ところで、このように全国から

移住した人々は、激しく転出と転入を繰り返している。まず、転出については、慶応元年(一八六五)三月の居住者六六一人の内、三五人が翌年三月までに他所へ転出している。一方、この間、転出者と同数の三五人が他所から移住しており、一年間に総人口の5%が入れ替わっている(この点については慶応二年の『五丁目人別帳』を利用した)。

土地と家屋をめぐる問題

以上、幕末期の市街地の住民構成について概観した。その結果、東日本を中心に全国各地から人々が移住し、激しく転入・転出が行われていることが判明した。また、開港当初の横浜には若い男性が多く、老人が極めて少ないことを分かってきた。さらに、広く借家経営がみられることも明らかになつた。

次に、市街地の総人口であるが、

五丁目人別帳の記述から推定して、市街地全体では数千人程度だったと思われる。もっとも、幕末期の人口増加は、「五丁目人別帳」をみると限り、やや停滞しており、それほど多いものとは言えない。しかし、明治期に入ると、再び東京などから的人口流入が始ま

り、明治十二年(一八七九)までに横浜市街地は大きく拡大し、四万人以上の人々が居住する「都市」になつていくのである(『共政帳』)。

ところで、こうした急激な人口増加は、さまざまな社会問題を引き起したと言われている。特に、土地と家屋の不足は深刻で、明治初年には積極的に旧市街地周辺の埋め立てと新市街地の建設が進められた。

また、土地不足から生じるトラブルも多発し、明治初年の横浜町会所のある記録は、地所押借人が借家人に立ち退きを命じたことからトラブルが多発したと伝えている。さらに、別の記録では、家屋や土蔵を抵当にした金融が、返済滞りから訴訟に至った事例を多く紹介している。

これらの問題は市街地の発展を考える上で最も重要な問題の一つではあるが、紙数の関係で詳しく述べることはできない。そこで、これらとの問題については、今後別稿を予定し、詳しく述べて検討してみた

いと考えている。(西川武臣)

震災後の渡辺文七 —大正十三年の衆議院議員選挙をめぐつて—

渡辺文七の横顔

渡辺文七は明治後半から昭和初期にかけて、横浜の生糸売問屋として活躍し、また正義派市議・刷新派三傑の一人としても知られる。震災の頃は、横浜蚕糸貿易商同業組合長の要職にあり、原富太郎らと共に横浜の復興に尽力した。

文七と震災復興の関係については、『横浜開港資料館紀要』第七号の「史料紹介 渡辺文七震災復興記」をみていただくことにし、ここでは、震災後の大正十三年五月におこなわれた衆議院議員選挙と渡辺文七の関係について、補足的なことを紹介する。

大正十三年の政局

大正十三年一月七日、前年十二月の「虎の門事件」が引きがねとなり、清浦奎吾内閣が成立した。これに反対する憲政会・立憲政友会・革新俱楽部は、倒閣運動・第二次護憲運動を展開し、中央政局は波瀾ぶくみの幕開けとなつた。ついで政友会が分裂し、床次竹二郎らは脱党して政友本党を組織。一月三十一日には衆議院が解散、五月十日が総選挙と決まつた。

同志俱楽部の動き

大正十三年一月七日、前年十二月の「虎の門事件」が引きがねとなり、清浦奎吾内閣が成立した。しかし、市議武岳亮恵が脱党し、中立派（実質は政府御用党）として立候補。政友本党成立の余波が横浜にも及んだのである。

一方、横浜市を金城湯地とする憲政会（横浜では、非政友派と称される同志俱楽部が、実質的な憲政会横浜支部であった）では、前代議士島田三郎亡きあと（大正十一年十一月死亡）、候補者擁立が難航した。そこに、（文）こと渡辺文七が登場する。以下、『横浜貿易新報』（横貿）と渡辺文七震災復興記（日記）から、選挙関係の年表を作成してみる。

▼四月十一日 同俱楽部で第二回銓衡委員会。交渉委員が推薦した員に通告、同志俱楽部は急遽協議会を開催（横貿）。

▼四月二十四日 推薦された渡辺文七は、周囲の形勢（少壮派の反対）に鑑み、立候補辞退を交渉委員に通告（横貿）。

▼四月二十五日 銓衡委員会が開催され、結果は若尾が二、六八三票・大浜一、三六一票・平沼一、一三五票で当選した。総選挙は護憲三派特に憲政会の勝利に終わつたが、横浜も同様であった。

選挙結果、そしてその後



に正式辞退を話す（日記）。
▼四月二十日 渡辺が中村に面会で理事会を開き、各区（横浜市は五区からなる）より五名計二十五名の銓衡委員をあげて候補者を推薦することが決定された（横貿）。
▼四月五日 同俱楽部で第一回銓衡委員会。次回に候補を確定して幹部会に諮り、交渉委員を挙げ、正式に候補者を推薦することに決定（横貿）。

▼四月七日 渡辺文七は上申信弘と小島周に立候補断念について相談（日記）。文七に立候補の打診がなされていたのである。『横貿』によると、解散当日から上申を総参謀に立候補運動を開始し、非政友派の公認を求めるところである。

まず政友会は、若尾幾太郎（前代議士若尾幾造の長男で政友会支部長、連合青年団が基盤）を擁立した。しかし、市議武岳亮恵が脱党し、中立派（実質は政府御用党）として立候補。政友本党成立の余波が横浜にも及んだのである。

一方、横浜市を金城湯地とする憲政会（横浜では、非政友派と称される同志俱楽部が、実質的な憲政会横浜支部であった）では、前代議士島田三郎亡きあと（大正十一年十一月死亡）、候補者擁立が難航した。そこに、（文）こと渡辺文七が登場する。以下、『横浜貿易新報』（横貿）と渡辺文七震災復興記（日記）から、選挙関係の年表を作成してみる。

▼四月十八日 上申を通じて中村に正式辞退を話す（日記）。

▼四月二十日 渡辺が中村に面会で理事会を開き、各区（横浜市は五区からなる）より五名計二十五名の銓衡委員を推薦することが決定された（横貿）。

▼四月二十一日まで、種々の事情から受諾せぬ中村に同志俱楽部は立候補決意を懇請、平沼は急転直下承諾の回答。中村の行動の裏には、渡辺周辺の動きが関係ありとみられている（横貿）。

▼四月二十一日 二時、千歳で中村・大浜・石川と上申・小島（文）が面会。午後九時二十分、大浜・柴田・西田が（文）の店を来訪し、同志俱楽部の銓衡委員会（二十五名出席）で満場一致平沼・渡辺の候補者を選定、承諾を受けた旨を伝える。組合員その他に相談の上返事することに（日記）。『横貿』によると、同日銓衡委員会が開かれ、元老組が疾風的に渡辺文七を担ぎ出し、承認を求めたとある。

一両日中に、理事会を開き両候補の承認の形式を踏む予定であった。▼四月二十四日 推荐された渡辺文七は、周囲の形勢（少壮派の反対）に鑑み、立候補辞退を交渉委員に通告（横貿）。

内務省警保局による普選第一回総選挙予想調査では、絹業団を地盤とする渡辺文七が、戸井嘉作、三宅磐と共に立候補者リストに挙げられている。三者とも当落見込は不明となつてゐるが、昭和三年の総選挙には文七は出馬せず、戸井と三宅は出馬、当選した。文七は国政に参画せぬまま昭和五年に亡くなつた。

さけぶ憲政会支部常任幹事の大久保宇之助が、公認如何にかかわらず憲政会候補として立候補。事務所は市議松村亮吉方に（横貿）。勢は、軍費に強い若尾、第三・四区を地盤とし第二・五区へ切り込んだ平沼、第一・二・五区を地盤とする大浜が優勢とみられていたが、武岳・大久保の登場で大浜の予断がつきにくくなつたとある。

▼『横貿』によると、この間の趨勢は、軍費に強い若尾、第三・四区を地盤とし第二・五区へ切り込んだ平沼、第一・二・五区を地盤とする大浜が優勢とみられていたが、武岳・大久保の登場で大浜の予断がつきにくくなつたとある。

▼五月六日 福富町新生館・賑町又樂館・敷島座で大浜・平沼の第一回政見発表演説会、加藤高明憲政会總務若槻礼次郎・早大教授安政会總裁応援（横貿）。

▼五月九日 松ヶ枝町角力場競館・平沼由村座で同志派大演説会、憲政会總務若槻礼次郎・早大教授安政会總裁応援（横貿）。

迎え、結果は若尾が二、六八三票・大浜一、三六一票・平沼一、一三五票で当選した。総選挙は護憲三派特に憲政会の勝利に終わつたが、横浜も同様であった。

内務省警保局による普選第一回総選挙予想調査では、絹業団を地盤とする渡辺文七が、戸井嘉作、三宅磐と共に立候補者リストに挙げられている。三者とも当落見込は不明となつてゐるが、昭和三年の総選挙には文七は出馬せず、戸井と三宅は出馬、当選した。文七は国政に参画せぬまま昭和五年に亡くなつた。

（吉良芳恵）

閲覧室

から



前号に引き続き、閲覧室にある
区史等を紹介します

〔磯子区〕

○磯子の史話（磯子区制50周年
記念事業実行委員会 昭和五三年六月
A5判 七六二頁）

二月 B5判 一一四六頁)
中区を中心とする都市の形成、
発展の概要を沿革編に、区内の地
区ごとのありさまを地区編に、昭
和の市民の苦済を市民編にと三編
に分けて記述されている。また、
写真や図版の多いのが特色となっ
ている。

〔西区〕

1/17～5月 輸出用に製作され
た横浜写真により、明治中期の横
浜の街並みと人々の生活を紹介す
る。

〔講座〕

(1)歴史講座「横浜近代経済史の諸
相」(開講中)
明治期の横浜の歴史を、貿易・
産業・運輸の各側面から明らかに
する。

9/20～1/15 市制施行から戦
後復興までの横浜のあゆみを市民
の生活を中心に各種資料によつて
再現する。

〔展示〕
(1)「波乱の半世紀 横浜市の誕生か
ら戦後復興まで」

9/20～1/15 市制施行から戦
後復興までの横浜のあゆみを市民
の生活を中心に各種資料によつて
再現する。

(2)「横浜空の世界」(仮題)

9/30 海外航路と横浜港「小風秀
雅 10/7 生糸貿易の扱い手たち」
上山和雄

●第一回 10/29 (日) 港南地区
センターハウス

〔歴史講演会〕
(5)「岩倉使節団歓迎晩餐会メニュー」
市 竹川欽也氏
櫻井 一
一点 (八王子市絹ヶ丘)

(1)1月30日(火)～2月2日(金)
室を休みます。(展示室は開いてい
ます。)

(2)各月末(9月を除く)

○ものがたり西区の今昔 (西区觀
光協会 昭和四八年七月 A5判
四二六頁)
はじめに、昔のはなし、江戸か
ら明治の頃、各地のはなし、学校
編、役所関係編、町名沿革と由来、
余話、付図、年表、関係者名簿、
あとがきで構成されている。区内
の聞き書きが、随所にちりばめら
れている。

○グラフィック西一白で見る西区
の今昔 (西区観光協会 昭和五
六年一〇月 A4判 一五〇頁)
西区のあゆみ、地区的いまむか
し、くらいまむかしの三つに分
けて、豊富な写真や図版で文字ど
おり「目で見る西区の今昔」を表
している。

○「波乱の半世紀」展記念講座
(2)明治(昭和)の横浜の歴史を政治・
経済・文化・社会などさまざまな
側面から明らかにする。

11/4 市民の登場と三宅磐(齊藤
秀夫) 11/11 「港の文学史」内田四
方藏 11/18 横浜と明治の政界(高
橋昌郎) 11/25 戦争のなかの市民
藤井忠俊 12/2 昭和戦前期の横
浜市政(高村直助)

(3)資料講読会
英文資料を講読しつつ、歴史的
背景などを考える。1月開講 講
師等詳細未定

9/9 「経営者原三溪と生糸輸出松
村敏 9/16 民間経済外交と横浜
商業会議所(木村昌人) 9/23 鉄
道敷設運動と蚕糸業者(老川慶喜)
後復興までの横浜のあゆみを市民
の生活を中心に各種資料によつて
再現する。

(1)「奉天城内八将軍会合写真」等
(旭区白根 廣田繁氏)
(2)京浜電鉄沿線案内等 二四点
(金沢区谷津町 関口正男氏)

(3)吉田橋開通記念絵葉書等 一七
点 (群馬県桐生市 清水信次氏)
(4)横浜絵葉書 五点 (三重県松阪
市 竹川欽也氏)

(5)「岩倉使節団歓迎晩餐会メニュー」
市 竹川欽也氏
櫻井 一
一点 (八王子市絹ヶ丘)

ミ 情 報

ミ 情 報

●第二回 11/26 (日) 当館講堂
いずれも午後一時三十分から、當
日先着順受付 講師内田四方藏
演題未定

田 谷 区 渡辺正直氏 第一回 参照
(7)海図(横浜の今昔) 一点 (茅ヶ
崎市下町屋 五十嵐進氏)
(8)黒船壁掛け 一点 (東京都大田区 服部一馬氏)
(9)黒船壁掛け 一点 (東京都大田区 服部一馬氏)

(1)芳年画「鹿児島戦争之図」等錦
絵 七点・色刷り石版画 一四点
(旭区白根 廣田繁氏)

田 谷 区 渡辺正直氏 第一回 参照
(1)芳年画「鹿児島戦争之図」等錦
絵 七点・色刷り石版画 一四点
(旭区白根 廣田繁氏)

●寄贈資料
(1)「奉天城内八将軍会合写真」等
(旭区白根 廣田繁氏)
(2)京浜電鉄沿線案内等 二四点
(金沢区谷津町 関口正男氏)

田 谷 区 渡辺正直氏 第一回 参照
(1)芳年画「鹿児島戦争之図」等錦
絵 七点・色刷り石版画 一四点
(旭区白根 廣田繁氏)

●寄託資料
(1)芳年画「鹿児島戦争之図」等錦
絵 七点・色刷り石版画 一四点
(旭区白根 廣田繁氏)

田 谷 区 渡辺正直氏 第一回 参照
(1)芳年画「鹿児島戦争之図」等錦
絵 七点・色刷り石版画 一四点
(旭区白根 廣田繁氏)

●寄託資料
(1)芳年画「鹿児島戦争之図」等錦
絵 七点・色刷り石版画 一四点
(旭区白根 廣田繁氏)

田 谷 区 渡辺正直氏 第一回 参照
(1)芳年画「鹿児島戦争之図」等錦
絵 七点・色刷り石版画 一四点
(旭区白根 廣田繁氏)

判 一二八頁)

区制三〇周年を記念して刊行さ
れたもの。金沢区のあゆみ、金沢
区の将来展望、金沢区の主な事業
計画のほか、「広報よこはま」区版
に連載された「金沢」と「ころ」を
を収録。

○南区の歴史 (南区の歴史発刊実
行委員会 昭和五一年三月 A5
判 六五〇頁)

○港北区史 (港北区郷土史編さん
会 行政委員会 昭和六一年三月 A
5判 一〇三二頁)

○港北区の誕生、第一編
序章 (港北区の誕生、第一編
地域の特質、第二編 港北区の歴
史、第三編 地区のあゆみ、第四
編 補遺、年表で構成、港北区植
生分布・古道図を付す。

判 一二八頁)

○港北区郷土史 (港北区郷土史編さん
会 行政委員会 昭和六一年三月 A
5判 一〇三二頁)

区制三〇周年を記念して刊行さ
れたもの。金沢区のあゆみ、金沢
区の将来展望、金沢区の主な事業
計画のほか、「広報よこはま」区版
に連載された「金沢」と「ころ」を
を収録。